

セレナのある日 イノ セントシスター外伝

荒潮提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マテリアルズ・ストラatosの方が執筆進まないんで息抜きに。

作者のシンフォギア作品である宇宙一ソラ一を貫く聖槍と若干繋がつてお
ります。

目 次

セレナのある日	イノセントシス
ターア外伝	1
マリア、死す（ギャグ的な意味で）	1
7	
セレナの不思議な1週間	1
セレナの不思議な1週間	2
番外編：セレナバースデー2018	19 14
25	
セレナの不思議な1週間	3
	31

セレナのある日

イノセントシスター外伝

あの日、平行世界から来た私のもう1人の姉さん。

私達は本当の姉妹じやないけれどそれでも、とても硬い絆で結ばれている。

でも、たまにしか会えなくて少し寂しい時もある。

これは、そんなある日の私、セレナ・カデンツアヴァナ・イヴの1日です。

「え？ 今日はマリア姉さんいないんですか？」

「ああ、今日はマリア単独でのインタビューでな。もうしばらくは帰つてこないと思うぞ」

「そう……ですか……」

ある日、平行世界のナスターシャ教授から許可を貰いマリアに会いに来たセレナ。平行世界のアガートラームの装者である彼女は自分の世界のただ1人のシンフォギ

ア装者である為頻繁には来れないがそれでも1週間に数回くらいは来ている。

この間のバレンタインの時も響と切歌と一夏と一緒にチヨコを作っていた。

因みに見た目は幼いが全装者の中でも2～3番目くらいの実年齢である事をここに記す（大体マリアの1～2歳くらい下）

「すまないなセレナ。なんだつたらマリアにメールを入れておこうか？」

「いえ、私が確認せずに来たのが悪いんです。マリア姉さんのお仕事の邪魔をする訳には行きませんし……」

「む？ そうか、もう……困ったな。立花と小日向、暁、月読と雪音は学校だし千冬さんも仕事、一夏は今日はマドカの買い物に付き合っているしな……どうしたものか……ん？ どーしたー？ 翼」

「奏、実はセレナが遊びに来てて……皆は今日はいないからどうしようと思つてて……

最近の子が好きそののも分からなくて……」

「そつちもか？ 実は私もでな……ほら、こつちだぜ」

「……お邪魔します」

「立花か・・・？いや、お前は平行世界の立花か・・・ん？ちょっと待って奏。何でここに平行世界の立花がいるの!?」

「いやー外散歩してたら見つけてな？とりあえず連れて来た」

「連れて來たつて・・・今日は小川さんも皆いないのよ!?どうするのよ!?」

「まあ、どうにかなるんじやないの？」

「かーなーでー!!」

ギヤーギヤーワーワー！

「あ、あの喧嘩は良くないですよ～」

「・・・ねえ」

「は、はい？」

「貴方、名前は？」

「わ、私はセレナ・カデンツアヴナ・イヴと言います。貴方は響さん・・・ですよね？何だか雰囲気が違うような・・・」

「・・・私はこことは別の世界から來たから。貴方と同じ」

「そうなんですか？」

「・・・とりあえずこここの食堂でも行く？」

「はい、お2人はまだ終わりそうにありませんし・・・」

チラツ

「大体奏はいつもいつも・・・」

「そういう翼だつてな・・・」

ギヤーギヤーワーワー！

「・・・あの2人はほつとこう

「・・・ですね」

その後予定より早めにインタビューが終わつたマリアが帰つて来てツヴァイウイン

グの2人はS・O・N・Gのオカン事マリア（誰がオカンよ！）による説教を受けた
という。

後グレ響はちょっとセレナとマリアとお茶してから帰りました。

ちやんちやん

マリア、死す（ギヤグ的な意味で）

「ふふんふーん♪」

どうも皆さん、セレナです。

今日もマリア姉さんのいる世界にきました。

最近ノイズも出なくて平和なんですよ私の世界。

今日はマリア姉さんと一緒にお茶をしようと思つてプリンを持ってきました。
美味しいですよねプリン、何処かの女神様も大好物です。

??? 「ぷーりんー！」

今何か聞こえたような・・・気のせいでしょう。

それよりもマリア姉さん、何処にいるんだろう?
またお仕事かな?

「あ、セレナちゃん」

「未来さん！お久しぶりです！」

「うん、久しぶり」

マリア姉さんを探していたら未来さんに会いました。
マリア姉さん曰くグラビティヤンデレズ？とか言うそうです。
どういう事でしよう？

（※イノセント・シスターのセレナはコールドスリープで7年間眠っていたのでそういう知識はありません。というかこの作品ではマムとマリアが教えません）

「どうしたのセレナちゃん？もしかしてマリアさん探してる？」

「はい、プリンを持ってきたので一緒にお茶をしようと思いまして。マリア姉さんは今何処にいますか？」

「マリアさんなら今響と一緒に訓練してるところだと思うけど……あ、そうだ。セレナちゃん、ちょっと付き合つて？」

「は、はい。分かりました」

＜戦闘曲 銀腕・アガートラーム＞

「弱くてもいい 涙を流してもいいさ！ 絶対負けない唄 それが心にあるのなら！」

「うおりやあ！」

「甘い！」

＜EMPRESS†REBELLION＞

10 マリア、死す（ギャグ的な意味で）

「うわわっ!?」

「油断大敵よ響。でも、動きは悪く無いわ。続けていくわよ！
の意味とは？」

「私も負けません！どおりやあ！」

十字なるこの輝き そ

数分後

「ふう、今日はこの辺りにしましょ」「
そうですね、はあくお腹すいた～」

「私も小腹空いて来ちゃつた。食堂いきましょう」

「はあゝい！ごつはん♪ごつはん♪」

「貴方、本当にご飯の事になると顔色変えるわね」

「えへへ♪」

シミュレータールームでの訓練を終え食堂に向かう2人。

他愛のない雑談をしながら食堂に入り思い思いのメニューを頼み軽く食事を済ませた2人はお茶を飲んで一休みしていた、そこに。

「ひーびき」

「うわあ!?み、未来!?急に目を塞いでどうしたの!?」

「少しだけ目を閉じててね。マリアさんもお願ひします」

「わ、分かつたわ・・・一体なんだつて言うの・・・」

「セレナちゃん、準備出来た? (小声)」

「はい、バツチリです! (小声)」

「それじゃあ・・・もう、目を開けてもいいですよ」

12 マリア、死す（ギャグ的な意味で）

「はーい、うわあ・・・！未来、その格好つて！」

「うん、このあいだのメイド型ギアだよ。どうかな？」

「うん、うん！やつぱりすんごく似合つてるよ未来！あれ？セレナちゃんもメイド服？」
「うん、2人をちょっと驚かせてあげようと思つてね？」

「・・・(ぽつかーん)」

「ど、どうかな・・・マリア姉さん。に、似合つてる？」

「・・・響、これを」

「これつてカメラですか？なんで私に・・・つてマリアさんどうしました？」

「我 が 生 涯 に 一 片 の 悔 い な し (グ ツ) ブ

シ タ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア !!

「「ま、マリアさあああああああああああああああああああああああああああああああん!?」」

「さああああああああああああああああああああああああああああああああん!?」」

「ど、どうしよう未来！ま、マリアさんが凄く満足気な顔で逝つちやつたんだけど！心な
しかめちやくちや笑顔だし!?」

「お、おちちちちちついてひ、響、こ、ここここここんな時はとりあえず一発叩けば直るは
ず！」

「未来こそ落ち着いて！それは壊れたテレビの直し方だよ！」

「わ、私のせいですか・・・!?」

「いや、セレナちゃんの所為じやないよ！これはアレだよ！愛が噴き出したんだよ！」「な、何でそこで愛なんですか！？」

「分かる」

「未来さん！？」

この後、マリアは医務室に運ばれ一命を取り留めたという。

セレナの不思議な1週間

1

「ふう・・・んう・・・良く寝たゞ」

ある朝、セレナは目覚めた時身体に異変を感じた。

なんだか身体が重たい、それに服が窮屈に感じたのだ。
視線を下に下ろすとおつきな双丘が。

セレナは目を擦りもう一度視線を下に向ける。デツカいメロンが出来ている。

もう一度言おう、デツカいメロンである。

セレナは壊れた機械みたいに首を持ち上げ、叫んだ。

何事かとナスター・シャ教授が見に来てセレナを見て呆気にとられたが直ぐに回復。

先ずは服を着なさいと言われたが着る服がない。

ふとセレナは以前マリアが来た時においていた服を思い出した。

とりあえず服はどうにかなつたが原因が分からぬ。

何か分かるかも知れないと思いギヤラルホルンを潜つてマリア達がいる世界に来たセレナ。

だがこちらでも問題が起きていたようだ。

「失礼します！エルフナインさんいますか！？」

「だ、誰！？」

「まさか、セレナデス!?」

「なんで大きくなつてるの？」

「それはこつちが聞きたいですよ！それよりエルフナインさんは何処に・・・「うわあああああああん！」今のは？」

「実はこつちでも問題起きちゃつてて・・・」

「見てもらつた方が早いデス」

「うん、セレナこっち来て
「う、うん……」

調と切歌に連れられていつたセレナはある場所に案内された。

そこはメディカルルームでしょつちゅう響がお世話になつている場所だ。

中に入ると泣き声が一層響いた。

中ではオロオロしているエルフナインと翼とマドカ、頭を抱える源十郎とクリスと一夏、理解が追いつかなくて思考停止中の千冬と赤ん坊を抱えてあやしている未来がいた。

赤ん坊は何処と無くマリアに似ている。

「あの、何があつたんですか？」

「えつと・・・どちら様ですか？」

「もしかしてセレナか？」

「は、はい。朝起きたらこんな身体になつちやいまして・・・原因が分からぬでもしか

したらエルフナインさんなら分かるかなと思つて来たんですけど……

「見ての通りだ。実はマリアが赤ん坊になつてしまつてな……何らかの聖遺物の所為なのだろうが……今の所こちらも原因不明だ」

「ああああああああん！！！ふえ？あうー……だあー！」

「ど、どうしたんですかマリアさん？わわっ！」

「おつとと……大丈夫ですか？未来さん」

「あ、ありがとうセレナちゃん……つてあら？マリアさん？」

「あぶうきやつきやつ」

「もしかしてセレナの所に行きたかったんじゃないか？」

「そうなの？」

「じゃなかつたらこんな風な笑顔な浮かべないだろう。どうする？セレナ」

「一緒にいたいけど……私、向こうの世界に帰らないといけないし……」

「それならこちらの装者を何名か暫く派遣しよう。戻るまでだがな」

「ありがとうございます！あ、ちよつと荷物だけ取りに行きますね。マリア姉さん、ちよつとの間だけ行つてくるね」

「やー！」

「マリア姉さん……ちよつと離して……結構力強い……！」

「やー！・・・ううー・・・びえええええええええええええええん!!」

「ああ、ごめんごめんマリア姉さん！よしよーし、ああ、どうしよう・・・」

「ギヤラルホルンのことなら大丈夫だ。どうやらマリア君が今来ている服はアガート
ラームが変異したものらしい。今の状態でもギヤラルホルンを通るのは問題ない」

「そうなんですか・・・ごめんねマリア姉さん。一緒にいこうか？」

「あう・・・ふにやあ・・・」

どうにかマリアをあやして元の世界に戻りナスター・シヤ教授に暫く彼方で過ごす事、
自分がいない間は彼方から応援が来ることを話し必要な荷物を纏めギヤラルホルンを
潜つて戻つて来た。

その間に用意された部屋に一通りの育児セットがいつの間にか用意されておりセレ
ナは感服していた。

だがセレナは思い知る事になる。

育児の大変さを。

セレナの不思議な1週間 2

前回のあらすじ。

セレナがデッカくなつてマリアが赤ちゃんになつた。

あらすじ終わり。

「おーいセレナちゃん!」

「こつちデスよー!」

マリアが赤ちゃんになつたりセレナが成長したりした日の翌日、セレナは響と切歌とカフエで待ち合わせをしていた。

肩から掛けている抱っこ紐にはマリアがすっぽり収まっている。

「おまたせしましたー。ごめんなさいマリア姉さんのお出かけセット用意するの手間取っちゃって」

「あうー」

「ところでセレナちゃん、そのぬいぐるみは?」

「これですか? 昨日作つてみたんです。モデルは私ですよ」

「すごいデス」

「マリア姉さんが寝てる間に作つたんでもちよつと徹夜しちやつて……今ものすごく眠た
いです……」

「よく見たら目の下に隈が……」

「今日のお買い物やめるデス?」

「ううん、大丈夫……ちょっと休めば大丈夫だと思うから……」

「うー……まうー（ぺたぺた）」

「マリア姉さん? どうしたの?」

「もしかして良い子良い子つてしたいんじゃないのかな?」

「小ちやくなつてもマリアはマリアデス」

「……（ぼー）」

「セレナ? (ちゃん?) どうしたデス? (どうしたの?)」

「うううううううううう元気爆発ですうう！」

「デス!?」

「な、なに!?」

「ふにゃ!びえええええええええん!!」

「マリア姉さんのお陰で眠氣も吹き飛びました！行きましょう！」

「よ、良かつたね···」

「それよりマリアがビックリして泣いてるデスよ」

「ああ!?ごめんマリア姉さん!?よしよーし」

「びやああああああ···ひつく、ぐすつ···きやははつ」

「良かつた、それでは、行きましよう」

「その前にお会計デス」

セレナ達はデパートに買い物に来た。

目的はセレナとマリアの服と日用品だ。

一応S・O・N・G・が用意してくれた分はあるが足りないかもしけないので念の
為買いに来たのだ。

セレナも初めてデパートに来て目が輝いている。

買い物も終わりクレープを食べて（マリアはミルク）を食べているとノイズが出現した事を告げるサイレンが鳴つた。

「ノイズだあああああああ!?」

「逃げろお！」

「助けてええええええええ!?」

「行くよ！切歌ちゃん！」

「任せろデース！セレナはマリアを守つててくださいデス！」

「うん、気をつけて！マリア姉さん、私達も避難しよう！」

「だあう！」

セレナは避難する人達に混じつて逃げるがその先にもノイズがいた。
慌てふためいて逃げ出す人々。

だが、セレナは立ち止まり首元にかかっているシンフォギア、アガートラームのペン

ダントを握り締める。

今戦えるのは自分だけだ。

だが、腕にはマリアを抱いたままでは戦えない。
ふと誰かの声が聞こえた。

— セレナ、私は気にせず戦つて —

「マリア姉さん?」

「あう?」

「・・・分かった、マリア姉さん。私、戦う!」

— Seilien coffin airgetlamh tron —

纏つたギアは以前とは違ひ大人びた雰囲気となりマリアのアガートラームをよりセレナらしい姿にしたともいえる。

彼女は右腕にマリアを抱き、左手にアームドギアを握りしめノイズに立ち向かう。

その後他の装者はセレナの世界に行つていたので救援に来た未来がセレナの援護に来てノイズを倒したセレナ。

響と切歌も合流し買い物に来たと思えばノイズ襲撃に巻き込まれた1日が終わつた。

「ふう、疲れたねマリア姉さん・・・姉さん?」

「すう・・・すう・・・」

「…寝ちゃつたか。まあ、仕方ないか色々あつたし。さて、私はお風呂の準備して来なきや」

「・・・すう・・・せーにや・・・」

「もしかして……今私の名前呼んだ？……気のせいかな？」

なおこの後マリアが起きてセレナの姿が見えないのを見て大泣きして慌ててセレナが来てあやしたのはここだけの話。

番外編：セレナバースデー2018

パンツパンツ

「「「セレナ！（ちゃん！）誕生日おめでとう！」」

10月15日、それはセレナ・カデンツアヴナ・イヴの誕生日である。

今回はS・O・N・G・ではなくセレナの世界で誕生日のパーティーだ。

机の上には一夏達が作つた大きなバースデーケーキにターキーなどの料理、あと何処から持つて来たのか氷の入つたバケツで冷やされているワインと一緒に巨大なアイス（犯人は切歌）が冷やされていた。

「わあっ・・・！ありがとうございます！こうして祝つて貰えるなんて・・・うれしいです！」

「沢山作つたからな。遠慮なく食べててくれ」

「既にガツツいてるのがいるけどな」

「ん？ ふあに？（なに？）」

「食つてから喋れ」

「今日の主役はセレナ、貴方なんだから楽しんで来なさい」

「うん！」

「（ああ、セレナのあの笑顔を見るだけで私は幸せだわ・・・！）」

「顔がにやけているぞマリア」

「にやけもするわよ。たつた1人の妹の誕生日をこうして祝う事が出来るんだから・・・」

「マリア・・・」

そう、マリアの世界のセレナは既に死亡している。

だからこうして祝う事が出来るのは誰よりも嬉しいのだ。

因みに彼女の背後霊としてマリアの世界のセレナはいるのだがそれはまた別のお話。

「マリア」

「マム、どうしたの？」

「ありがとう、あの子の為にこのようなパーティーを開いてくれて」

「当然じやない、妹の為だもの。マムも楽しんでね」

「では、お言葉に甘えて」

「あ、でも塩分は取り過ぎたらダメだからね」

「そこは流石にダメですか」

「ダメに決まつてるでしょ」

つと、そんな会話をしていたら新たなメンバーが来た。
並行世界の響と奏だ。

グレ響は奏の背中に隠れながら入つて來た。

どうやら他人の誕生日を祝うのは初めてらしく照れ臭いらしい。
顔が赤くなっている。

「やつほーお待たせー。いやーコイツを連れてくるのに手間取っちゃって」

「・・・私は良いつて言つたのに無理やり連れて来たくせに」

「またまたー、しつかりプレゼント用意してたじyan。それで来ないつてのは無しだぜ
？ほらよつ」

「わつとと・・・急に押さないでよ・・・」

「あの、大丈夫？」

「う、うんかいじょ・・・う・・・ぶ・・・？（カタマリ）」

「あり？ 固まつちまつた」

「奏、もしかしてあの子に言つてないの？」

「わりい、言い忘れてた」

「・・・あの、セレナ？」

「何ですか？」

「なんでおつきくなつてるの・・・？」

「あはは・・・ビックリさせちゃつたかな？」

何故セレナが大きくなっているのか（ある意味元の姿）それはセレナの不思議な一週

間をゞ覧くください（近日中に投稿します）

「そりや……と、友達の姿が変わつてたら誰だつて驚く。……でも、私とアンタは変わらず友達だよ」

「ふふつ、貴方も変わつたね」

「未来のお陰・・・かな。それより、はい、コレ」

「プレゼント？ ありがとう、嬉しい。開けても良い？」

「うん、良いよ」

セレナがグレ響から貰つたプレゼントを開けると中にはシルバーのアクセサリーが入つていた。

オーダーメイドであろうそのブレスレットにはセレナのつけている髪飾りと似た飾りが付いていた。

「これって・・・」

「アンタの付けてる髪飾り、それと似たような作つた。・・・初めて作つたしあんまし出来も良くなないかもしれないけど」

「ううん、すつごく綺麗。つけても良い？」

「良いけど・・・ほんとに良いの？」

「大切な友達からのプレゼントだもの。どんな物であれ嬉しいです。ありがとうございます」

「・・・ありがと（ぶいっ）」

因みにこの時グレ響の世界の未来さんが何かを察知したという。

セレナの不思議な1週間 3

マリア赤ちゃん事件から1週間、ようやくマリアは元に戻れた。

「みんなごめんなさい、迷惑かけちゃって」

「大丈夫ですよマリアさん！皆で頑張りました！」

「お前はマリアが泣いてたら直ぐにアイツに泣きついてたろこのバカ」

「他にも使い物にならなかつたのが何人かいたがな（ジトー）」

「「ぷいっ」「」

「お前らだよそこの防人と残念姉妹」

「私たちも」

「頑張ったデース！」

「ありがとう、切歌、調。それと貴方達はもう少し家事ぐらいまともになりなさいな」

「「うぐっ」「」

「ところで、セレナは何処に行つたの？」

〔〔〔〔〕〕〕

「どうしたのよ皆揃つてヤバいって顔して」

「そ、それはそのお・・・あははは・・・」

「……まさか、セレナに何かあつたんじやないでしようね!?」

—いひやいですよマリアゼリン

一落ちつけシステム！セレナは大丈夫だ！ある意味何かあつたけど！」

「どう大丈夫ごつて言つてゐるぢろ!!

「このバカ！何火にガソリン注いでんだ！余計ややこしくなつただろうが！」

「ともかくまずはマリアを止めるぞクリス！ マドカ！ いつまでもヘソ曲げてないで来い！」

〔二二一〕

「切歌！調！こうなつたらセレナ連れて来い！多分エルフナインの何処にいるはずだ

!

「合点、テース！」

「「うるせえ！」」

「それでは、ありがとうございました」

「また何か異常があつたら来てくださいね」

「はい」

「セレナ」

「見つけたデス！」

「あれ？ 晓さん、月読さん。どうしたんですか？」

「セレナ」

「はい？」

ガシツ

「え？」

「急いで」

「来るデス！」

「ひやああああああああああああああああ・・・」

セレナを引っ張つて全速力で走るきりしらコンビ。

セレナは訳が分からず目がグルグルしている。

司令室に着いた直後ドアのすぐ横に響が吹つ飛んできてびっくりしたきりしら。

どうやらマリアがバーサークしており装者+OTONAで制圧しに掛かつたがまるで歯が立たなかつたようだ。

あのOTONAが片膝をついて肩で息をしている。

他の装はというと翼は司令室のモニターに突き刺さり千冬も同じく下半身から突つ込んでいる。

クリスは自爆特効でもしたのか全身火傷で気絶、マドカはガンギールが首の後ろの襟に刺さり天井に宙づりに、一夏は絶賛スタンピングされ中だつた。

マリアは完全に暴走しているようだ。

「これどう止めるデス . . . ?」

「遺書書く準備しておこう切ちゃん」

「そんな準備はいらないデスよ調」

「マリア姉さん……Seilien coffin airport——lambh tro

—とりあえず……反省していくせい！」

一
半
十
刀

セレナがアガートラームを纏つてかかと落としてマリアを気絶させて事なきを得た。

なおマリアには始末書が言い渡され1週間の謹慎処分になりましたとさ。

「（ 、・ω・、）（しょぼんぬ）」

「ま、マリア大丈夫か？」

「セレナに嫌われた・・・」
「・・・はつ？」

— マリア姉さん、暫く反省してください —

「つばさあ・・・セレナが・・・セレナがあ・・・」

「泣くなマリア！これにに関してはお前の自業自得だ！」

「・・・どうすんだアレ、ずっと泣きっぱなしだぞ」

「しゃーない本部壊したんだし」

「全く、マリア姉さんつたら（ぶんすか）」

「・・・しつかしまさかの戻らないとはなあ。本来の年齢よりちょい下くらいなんだつけ

？

「はい、確か13～6歳くらいだつてエルフナインさんは言つてました」

「大体あたしらと同じ年齢か。学校どうすんだ？」

「その事なんですけどマムが向こうのリディアンに編入させてくれるそうです」

「なら、勉強とかないとな。俺が協力するぜ」「ああ、任しどきな」

こうして1週間に渡る不思議な日々は終わつた。

セレナの身体が戻らなかつた原因は不明だが問題なさそうなので良しとした。

因みにセレナは頭が良かつたのか教えた事は直ぐに覚え向こうのリディアンで試験を受けた時は文句無しの高得点連発だつたとか。